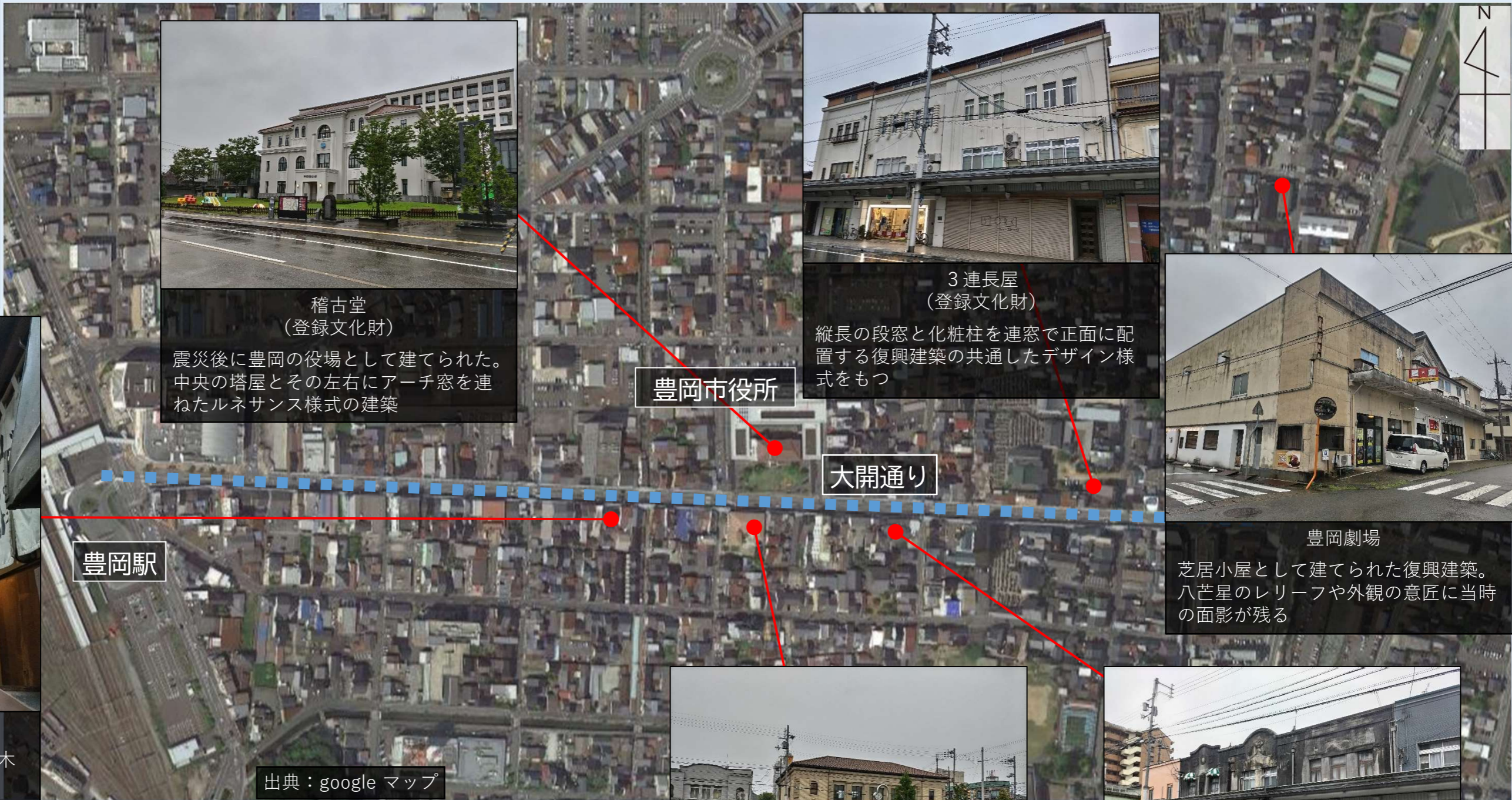
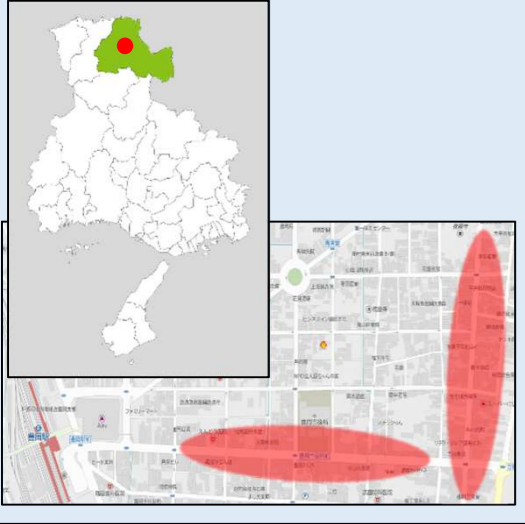


所在地
豊岡市中央町、元町など

大正14年（1925）の北但大震災により市街地の7割が被災した豊岡市で、近代化を推し進め、火災に強い建物を増やすため、豊岡駅から東に延びる大開通りを中心に鉄筋コンクリート造の建物を数多く建築し、現在も、「豊岡復興建築群」として残っている。



稽古堂
(登録文化財)
震災後に豊岡の役場として建てられた。中央の塔屋とその左右にアーチ窓を連ねたルネサンス様式の建築



3連長屋
(登録文化財)
縦長の段窓と化粧柱を連窓で正面に配置する復興建築の共通したデザイン様式をもつ



豊岡劇場
芝居小屋として建てられた復興建築。八芒星のレリーフや外観の意匠に当時の面影が残る



オーベルジュ豊岡1925
(登録文化財)
当初は銀行として建てられた。外壁はタイル張りで正面に壁柱を並べ、重厚な外観を持つ



11連長屋
それぞれ個性的な外観を持ち、昭和初期の趣をもつ商店街のイメージを印象づけている



公設市場
震災後の復興事業として建築され、木造の市場では日本最古級

豊岡駅

豊岡市役所

大開通り

出典：google マップ

ストーリー	大正10年～(1921)	豊岡町（現豊岡市）が近代都市化を目指して「大豊岡構想」を掲げ、大規模な都市計画を進める。
	大正14年(1925)	円山川河口付近を震源とするM6.8の直下型地震、北但大震災が発生。町の市街地の約7割が被災する甚大な被害となった。
	震災後	兵庫県知事や豊岡町長などによる震災復興協議会が開催され、区画整理、鉄筋コンクリート造の建物の建築などが進められた。 豊岡駅から東に延びる大開通りに公共施設が集中して建設され、民間においても、鉄筋コンクリート造のものを建てる場合には補助制度を設けられ、48軒の申請があった。
	現在	現在でも35棟が「豊岡復興建築群」として残っている。

景観の構成要素 北但大震災からの復興建築群、稽古堂、オーベルジュ豊岡1925、豊岡劇場、長屋、公設市場 等、豊岡の歴史・文化に関わる景観とストーリー